

申請者	中村 忠司
所属	東京経済大学 コミュニケーション学部
調査課題	海外就業体験を中心とした異文化対応力育成教育に関する研究
調査研究の趣旨	海外インターンシップ研修を通じた異文化理解および対応能力を高めるための教育方法の確認とその評価方法の策定を行う。
内容	<p>海外オンライン研修調査とシドニー海外研修関係企業ヒアリング調査を実施した。また学生用の教材として1つのテキストを検討した。</p> <p>①海外オンライン研修調査(シドニーPBL型研修+フィリピン語学研修) 2023年2月20日~2月24日 5日間 参加学生15名</p> <p>②シドニー海外研修関係企業ヒアリング調査(語学学校、就業体験受入先企業2社、コーディネイト会社計4社) 2022年8月29日~9月2日</p> <p>③海外研修教材の検討(海外危機管理小冊子) 『海外留学危機管理ハンドブック』海外留学生安全対策協議会(2020)</p>
成果	<p>総評</p> <p>①海外オンライン研修について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外オンライン研修を、あくまでリアルな海外研修の代替的研修として捉えていたが、企業のテレワークやオンライン会議など主となる業務もオンライン化が定着していく中で、本格的に導入する研修として改めて効果を検証していく必要がある。 ・今回同時期にリアルな海外就業体験を実施したカナダ・バンクーバーおよびオーストラリア・シドニーの日系企業(旅行会社、メディア)では、コロナの収束後においてもテレワークが基本となっており、就業体験に合わせる形で指導する社員が出社する形であった。 ・海外オンライン研修として「シドニーPBL型研修とフィリピン語学研修5日間」を行った。オンラインならではの新たな試みとして、2カ国を同日に行う研修とした。 ・短期間の研修の場合、時差の少ない国・地域を選択することで、効率的に研修時間を確保することができる。 ・オンライン研修でも現地のリアル映像(今回はシドニーオペラハウスからの実況中継)などを研修の中に取り込むことで、座学だけの場合よりも臨場感が得られ、学生の興味がより増す。ライブ感を演出することは効果的である。 ・学生はYouTubeやTikTokなどショートムービーに普段から慣れているので、事後アンケートでは現地の映像や画像をもっと見たいとの要望が複数あった。 ・PBL型研修の最終日に担当する日本人の現地スタッフが、「なぜ海外で働くことになったか」について講話を行った。学生にとって年代が近い若いスタッフが話すことで、学生自身がロールモデルとして受け止めることができた。 ・語学研修は、マンツーマンで5日間同じ講師が担当した。短期の研修では毎回講師が替わるのではなく、同じ講師が受け持つことで、徐々に打ち解けることができる。リラックスすることで会話を自分から進めていく

	<p>効果が見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語学研修はテキストによる文法とフリートークを組み合わせた。英語に自信がある学生はフリートークを望み、あまり自信のない学生はテキストがあることで安心して受講できたと話していた。学生のレベルや性格によって、講師自らが判断して学習パターンをカスタマイズしていきやり方も検討できる。 ・フィリピンの場合、Wi-Fi 環境が不安定で、回線が途切れるなど、タイムラグが発生した。インフラの確認が必要となる。ただ、それもそれぞれの国の状況を反映しているため、それを理解することも大切である。 <p>②海外研修関係企業ヒアリング調査について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアは国の政策として留学誘致を推進しており、コロナ禍でも多くの学生が留学先としてシドニーにきている。 ・ホームステイでは、各家庭に新型コロナウイルス抗原検査キットを購入してもらい、陽性反応が出たらすぐにレポートしてもらうなど対策が取られている。またホームステイ先の住宅は一般的に広く、バスルームが 2 つ以上ある家庭が多いので、家族と使用を分けるなどで対応されている。陽性であっても、症状が重くなければホームステイ先での待機が基本とされている。 ・日本人学生が持つホームステイのステレオタイプなイメージ(白人の家庭で、一緒に洋食の朝ご飯を食べるなど)は、実際に参加することで大きく変わる。シングルマザーの家庭や他国の留学生と同じホームステイ先で生活することで、異文化や多様性に対する理解が深まる。 ・語学学校では、「英語が話せるようになって、何ができるようになるのか。何かをするための知識なのか」など、常に目的に戻るように指導されている。語学のスキル向上もあるが、短期の研修で特に就業体験と組み合わせる場合は、常に参加した目的を意識させる指導が重要になる。 ・就業体験でも、「学生が何をもち帰りたいのか、何のためにやるのか」など、目的に戻る指導がなされている。海外就業体験は1～2週間程度の短期が多く、業務スキルをつけるというよりも、自分が何のために参加しているのかということを常に参加学生に意識させることが重要になる。 ・現地イベントの運営補助の場合でも実施日からではなく、準備段階から参加させることで、そのイベントの意義を把握したうえで業務を行うことができる。ただ参加したという思い出に終わらないプログラム作りが大切になる。 <p>③海外研修教材の検討(海外危機管理小冊子)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リアルな海外就業体験研修に参加する学生に『海外留学危機管理ハンドブック』を読んでもらい、どのようなことが役立つかについて感想を聞いた。 ・実際に犯罪に巻き込まれない行動を理解するということもあるが、学生にとってはストレスコントロールやホームステイに関する不安があり、その対応についても関心があることがわかった。
成果報告	<ul style="list-style-type: none"> ・2023年3月10日 東京経済大学コミュニケーション学部 FD 研修において報告。 ・今回の海外オンライン研修については、大学ホームページ内の以下の学部特設ページで報告。 https://note.com/tokecom/n/n956ff849f6a8
別添資料	<p>FD 研修資料パワーポイント(個人の写真を含むため、WEB などでの公開はお控えください)</p> <p>研修・現地調査等学部内共有報告資料</p> <p>研修学生向け学内説明資料</p>